

人形浄瑠璃

文楽

生写朝顔話

明石船別れの段
笑い藁の段
宿屋の段
大井川の段

昼の部



夜の部



ひらかな盛衰記

松右衛門内の段
逆櫓の段

日高川入相花王

渡し場の段



2003.11
文楽
BUNRAKU
無形文化遺産
Intangible Cultural Heritage

©青木信二



芸術文化振興基金助成事業

2019年 **10月10日[木]** ■昼の部 13:30開演 (13:00開場)
■夜の部 18:30開演 (18:00開場)
札幌市教育文化会館 大ホール

札幌市中央区北1条西13丁目 www.kyobun.org/

◎お問合せ／事業課 TEL 011-271-5822 (9:00~17:00 原則第2・第4月曜日は休館)

〈料金〉指定席 5,000円 (教文ホールメイト、KitaraClub会員 4,500円)

U-25席 3,000円 (25歳以下対象。教文プレイガイドのみ取り扱い、年齢を証明するものをご提示ください。)

※教文ホールメイト、KitaraClub会員の割引は教文プレイガイドのみの取り扱いです。

※未就学児のご入場はご遠慮ください。車椅子ご利用の方は前日までに教文プレイガイドにご連絡ください。

※お客様用駐車場はございません。お近くの有料駐車場をご利用ください。

チケット発売日

8月3日[土]

〔チケット取扱〕

◆教文プレイガイド 011-271-3355

◆道新プレイガイド (大通西3道新ビル1階) 0570-00-3871

◆札幌市民交流プラザチケットセンター (北1西1市民交流プラザ2階) 0570-00-3871

◆チケットぴあ 0570-02-9999 (Pコード 495-696)

◆ローソンチケット 0570-000-407 (Lコード 12252)

主催：札幌市教育文化会館 (札幌市芸術文化財団)、

公益財団法人文楽協会

共催：北海道新聞社

後援：札幌市、札幌市教育委員会、文化庁

〈和文化プロジェクト〉

公演当日、和装の方
和風小物を持参の方に
特典プレゼント



教文伝統芸能シリーズ

二〇一九年十月 地方公演 配役表

昼の部

解説（あらすじを中心に）

竹本 小住太夫

生写朝顔話

明石船別れの段

豊竹	芳穂太夫	宮城阿曾次郎	吉田 文司
竹澤	團 吾	明石の船頭	桐竹 勘介
鶴澤	清 允	娘 深雪	豊松 清十郎
		大船の船頭	大 ぜい

笑い葉の段

中	竹本	小住太夫	下女 お鍋	吉田 簀太郎
	鶴澤	寛太郎	下女 小よし	桐竹 勘次郎
			手代 松兵衛	吉田 文哉
			我屋徳右衛門	桐竹 勘壽
			萩の 祐仙	桐竹 勘十郎
			岩代多喜太	吉田 玉輝
			駒澤次郎左衛門	吉田 文司
			朝顔若娘深雪	豊松 清十郎
			奴 関助	吉田 勘市
			供の 奴	大 ぜい
			近 習	大 ぜい
			川越人足	大 ぜい

宿屋の段

竹本	津駒太夫	駒澤次郎左衛門	吉田 文司
竹澤	宗 助	朝顔若娘深雪	豊松 清十郎
野澤	錦 吾	奴 関助	吉田 勘市
琴		供の 奴	大 ぜい
		近 習	大 ぜい
		川越人足	大 ぜい

大井川の段

豊竹	睦太夫	川越人足	大 ぜい
鶴澤	清 丈		

望月太明蔵社中

夜の部

解説（あらすじを中心に）

豊竹 亘太夫

ひらかな盛衰記

松右衛門内の段

中	豊竹	芳穂太夫	船頭 権四郎	吉田 玉志
	竹澤	團 吾	女房 およし	吉田 清五郎
			駒 若君	吉田 簀之
			船頭松右衛門兼光	桐竹 勘十郎
			樋口次郎兼光	吉田 勘彌
			腰元 お筆	吉田 勘次郎
			船頭 又六	桐竹 亀次郎
			船頭 富蔵	吉田 簀一郎
			船頭九郎作	吉田 簀太郎
			近所の衆	大 ぜい

逆櫓の段

豊竹	睦太夫	船頭 権四郎	吉田 玉志
鶴澤	清 丈	船頭 又六	桐竹 亀次郎
		船頭 富蔵	吉田 簀一郎
		船頭九郎作	吉田 簀太郎
		近所の衆	大 ぜい

日高川入相花王

渡し場の段

清姫	竹本	小住太夫	清姫	吉田 簀紫郎
船頭	豊竹	亘太夫	船頭	吉田 文哉
	竹本	碩太夫		
	鶴澤	寛太郎		
	野澤	錦 吾		
	鶴澤	清 允		

望月太明蔵社中

生写朝顔話 明石船別れの段・笑い葉の段・宿屋の段・大井川の段

お家騒動にすれ違いの恋を絡ませた物語。主人公のモデルは美男とされる17世紀の陽明学者熊沢蕃山。出合いの場で男が女の扇にしたためる朝顔の歌「露のひぬ間の朝顔：」も蕃山の作です。

京で学ぶ宮城阿曾次郎は、武家の娘深雪と出合い、恋仲に。けれども、お家乗っ取りの陰謀を阻止すべく急遽故郷の周防へ。別れを悲しむ深雪もまた両親と安芸に帰ることになり、別々の船で西へ向かう二人が、偶然、明石浦での風待ちの間に再会。恋人と一緒にいると知る深雪、しかし、船が動き出し、遠ざかる阿曾次郎の船に扇を投げ入れるのです。

その後、阿曾次郎が駒澤次郎左衛門と改名したとは知らず、深雪は駒澤との縁談を拒んで家を出、阿曾次郎を探して流浪し失明、東海道の嶋田宿で朝顔の歌を唄って露命を繋いでいます。そこに駒沢が宿泊。相役の岩代は陰謀に加担する悪者で、しびれ葉を茶に混ぜ、駒澤に飲ませようと一味の医者祐仙と画策。祐仙は、宿の主人が笑い葉にすりかえたとも気づかず、駒澤の前で堂々と毒見、こっそり飲んだ解毒剤も効かず、笑い苦しむはめに…。

その夜、朝顔の名で呼ばれる落ちぶれた深雪の姿に衝撃を受ける駒澤。が、岩代の手前、名乗ることもできず、翌朝立去。残された扇から恋人と知った深雪は、あとを追って大井川へ。けれども、大雨で川止め、恋人はすでに渡ったあと。身の不運を嘆き、絶望する深雪を救ったのは…。

天保3年（1832）、大坂の稲荷社内で初演、司馬芝叟の長話『薙』をもとにした読本『朝顔日記』（1811）や歌舞伎による、山田案山子の五段の時代物で、今回は二、四段目から上演いたします。

ひらかな盛衰記 松右衛門内の段・逆櫓の段

木曾義仲の忠臣樋口次郎兼光と、孫を殺された恨みを乗り越える老船頭の物語。舞台となる摂津国福島（大阪市福島区福島）は、源義経と梶原景時が、船を前後自在に動かす逆櫓の導入をめぐって争論した地と伝えられています。

かわいい孫はいつ戻るか、早く会いたい…。福島船頭権四郎は、先々月、娘と孫の植松と一緒に亡き婿の菩提を弔うため巡礼に出て大津に宿泊。深夜、宿になだれ込んだ捕り手に驚いて大慌てで逃げ出し、孫と隣の宿泊客の子との取り違えに気づいたのは、かなりたつたからのこと。孫には住所を記した笈摺があり、先方から訪ねて来るはずと、子供を連れ帰って大切に養い、孫の帰りを待ち焦がれていました。

けれども、笈摺を頼りに訪ねて来たお筆が告げたのは、孫の死。義経勢に討たれた義仲の若君と間違われ、殺されたのです。子供を諦め、若君を返してとのお筆の身勝手な言葉に、権四郎は激怒。若君を殺そうと、最近婿入りした松右衛門に加勢を求めたところが、婿は若君の味方に…。

実は、松右衛門こそ樋口次郎兼光。婿入りして、権四郎から逆櫓の技を習い、義経の船の船頭となって主君の仇を討とうとしていたのです。縁あつて我が子となった植松の忠義を喜び、婿として、舅の怒り、悲しみに心を寄せ、若君を助け、武士道を立てさせてほしいと願う樋口。その誠意に心を打たれ、権四郎は恨みを捨ててのでした。

夕方、海へ出て、梶原景時配下の船頭たちに逆櫓の技を教えた樋口は、正体を見抜いて襲いかかる船頭たちを難なく倒します。

幼子への思いが胸に迫る「松右衛門内」。「逆櫓」は船を漕ぐかけ声も勇ましく、三味線の演奏も人形の動きも豪快。文耕堂ほかの合作、元文4年（1739）、竹本座で初演された五段の時代物の三段目です。

日高川入相花王 渡し場の段

道成寺（和歌山県日高郡日高川町）の安珍・清姫伝説を題材とした時代物。恋しい安珍を女に奪われ、嘆き、妬み、恨んで、大蛇と化してしまった清姫。安珍を取り殺そうと、波の荒れ狂う日高川を泳いで渡る迫力に、ご期待ください。

『日高川入相花王』（1759・竹本座・近松半二ほか）の外題で上演される現行の「渡し場」は、素人浄瑠璃でも知られた絵師の耳鳥斎が、『道成寺現在蛇鱗』（1742・豊竹座・並木宗輔ほか）の四段目の同様の場に手を加えた素浄瑠璃をもとにしたものと考えられています。

◎字幕表記がございす。席によっては字幕が見えにくい場合がございますので、あらかじめご了承ください。
◎出演者の急病やその他やむを得ない事情により、代役もしくは演目を変更して上演する場合がございます。
◎あらかじめご了承ください。
◎開演中の写真撮影・録画録音ならびに携帯電話・スマートフォン等の使用は固くお断りいたします。